HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	農業技術教育研究ノート
Author(s)	柳田, 泰典
Citation	北海道大学教育学部社会教育研究室報, 1977, 103-110
Issue Date	1978-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28608
Type	departmental bulletin paper
File Information	1977_P103-110.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究ノート

農業技術教育研究ノート

社会教育研究室・大学院　修士課程　柳　田　泰　典

(1) 大型機械化「一貫」体系への移行

北海道稲作は大型機械化「一貫」体系へ急激に移行しつつある。北海道稲作の機械化は、1976年において、乗用トラクター装備率6割、機械移植面積8割、自脱型コンバインによる機械刈取面積6割5分に達している。

このような主要生産過程の「一貫」機械化は、農民経営（基本的性格は「小農」と把握される）の機械化という問題とともにその急激な動態（1974年にはそれぞれ3割～4割）が特徴的である。

農民経営と機械化について、マルクスは『資本論』（第6篇第47章）で「分割地所有は、その性質上、労働の社会的生産力の発展、労働の社会的な諸形態、資本の社会的集積、大規模な牧畜、科学の累進的応用を排除する」と規定している。この基本的性質によれば農民経営の機械化はありえぬことになる。またレーニンは「一方では、まさに資本主義こそが、農業における機械使用をひきおこし拡大する要因であり、他方では、農業への機械の応用は資本主義的性格をもつ、すなわち、それは資本主義的諸関係の形成とそのいっそうの発展にみちびく」(1)と規定し機械化を資本主義農業の展開としてとらえている。

すなわち、北海道農業における機械化「一貫」体系への移行は、農民経営の基本的性格に条件づけられながら進行していると同時に、農民経営それ自身の性格を変革しつつあると捉えることができる。

このような日本農業における機械化の進展は、資本主義的生産様式下の農民的生産様式としてその全構造を分析しなければ基本的性格、基本的矛盾を把握することはできない。

2つの異質な生産様式は、第1に、新しいもの（資本主義的生産様式）と古いもの（農民的生産様式）とのからみ合いとして存立し、けっして孤立したものではない。第2に、支配的である資本主義的生産様式は、古い形態である農民的生産様式を貫徹し、新しい資本主義的内容をあたえる。第3に、異質な生産様式は一連の矛盾をかかえざるえない。

2つの異質な生産様式をこのようにとらえると、今日の日本農業は次のように性格づけられる。「対米従属的な国家独占資本主義とそのなかに包摂(2)され、そのもとで展開される広範な小商品生産農業との相互関係」(3)「現代資本主義の再生産と蓄積の構造にいよいよ深く包摂(2)され、ますます巨大化した独占体の農業、農民にたいする系統的な搾取、収奪が多面にわたる国家独占資本主義的な政策的操作によって支えられ……いっそう強化されてきた」(3)すなわち、現代資本主義（対米従属的な国家独占資本主義）の再生産と蓄積の構造に深く捉えられ、系統的な搾取、収奪のもとにある小商品生産農業と性格づけることができる。このような関係と矛盾は、農産物販売、農用資材、生活物資、労働力、資金等の市場関係をつうじて強化されているのである。

日本農業のおかれている基本的条件は、このように性格づけられるが、ここには、支配的である資本主義的生産様式は、古い形態である農民的生産様式を貫徹し、新しい資本主義的内容をあたえるという意義はとられてはいない。日本農業における商業的農業の発展、農業の機械化、すなわち、日本農業と農民の質的変化をおさえる必要がある。

この分析視角は、資本主義による社会的労働の生産力の向上と労働の社会化論である。

以下ではヴェ・イ・レーニンの視角を中心にのべていく。

2) 『ロシアにおける資本主義の発展』と『人民の友とは何か』を中心とし、①レーニン全集(ロシア語版、第5版)、②レーニン10巻選集(①一第5版の訳)、③レーニン全集(ロシア語版第4版の訳)を比較検討する。

『ロシアにおける資本主義の発展』(表1を参照)では、「資本主義の進歩的な歴史的役割は、二つの短い命題に要約することができる。すなわち、社会的労働の生産力の向上と労働の社会化である。」(A一②一下)とのべられている部分をあきらかにしなければならない。結論的にのべるならば、社会的労働の生産力の向上は客観的側面であり、労働の社会化は主体的側面であるということができる。

第1に、社会的労働の生産力の向上(上昇とも訳せるповышение)では、社会的労働一の一生産力(производительных сил общественного труда)(B一①上一②上)の発展(развитие)と社会的生産力(общественных производительных сил)(B一①下一②下)の発展のもう一つの特性がのべられている。

社会的労働の生産力の発展は、機械制大工業の時代における資本主義的生産の完全な技術改造と技術改造の過程(「一連の不均等と不均衡のうちで以外にはすすむことはできない。[4]」)を産業部門間、地域間でとらえている。

社会的生産力の発展のもう一つの特性では、「生産手段(生産的消費)の増加が、個人的消費の増加をはるかに上まわることにある。[5]」とし、資本主義による社会的生産力の発展の必然性についてのべている。

すなわち、社会的労働の生産力の向上とは資本主義的生産における完全な技術改造、この改造過程の社会的展開必然性のこととしてとらえることができる。(ここでは解明できないが、目次では、社会的労働の生産性の向上、本文では、社会的労働の生産力、社会的生産力、それぞれ、производительности, производительных сил общественного труда, общественных производительных сил, と異なる用語を使用している。)(表1)。

第2に、労働の社会化について

ここではまずレーニンの労働の社会化論でよく引用されている『人民の友とは何か』について述べる。(表2) よく引用されるのは②、③の部分であるが、原文を忠実に訳せば④一資本主義的生産による労働の社会化は、けっして、人々が一つの場所で労働することのなかにあるのではなくて(これは過程の一小部分にすぎない)、資本の集積が社会的労働の専門化、各産業部門における資本家の数の減少、個別的な産業部門の数の増大をともなうこと、一すなわち、(生産の多数分散した過程が生産の一つの社会的過程に融合すること)、のなかにある。このような訳になる。括弧部分は②③のように訳してもよいが直訳するとこのようになるということである。

直訳することによって本質的に変わるのは②③では、……人々が一つの場所で労働することにあるのではなく……ーすなわち、……融合すること、にある。が④では、……人々が一つの場所で労働することのなかにあるのではなく……ーすなわち、……融合すること、のなかにある。となることである。

つまり、労働の社会化は、多数の分散した生産過程が一つの社会的生産過程に融合すること、それ自体を指しているのではなく、一つ社会的生産過程に融合することの、そのなかにあるということになる。

『ロシアにおける資本主義の発展』(表1)においても、資本主義による労働の社会化は次の諸過程のなかに現われる。(c-②)と表現されている。諸過程は第1から第7までのべられているが労働の社会化とのかかわりで総括的には次のようにのべられていると考える。すなわち、「経済的発展の飛躍的性格、生産方法の急速な改変と生産の巨大な集積、人格的隷属と家父長制的関係のあらゆる形態の消滅(直訳による改変)、住民の移動性、大きな産業中心地の影響、等々ーこれらすべて、生産者たちの性格そのものの奥深い(表1-D、②の深刻なは誤訳)変化をもたらさないわけにはいかない」、この部分の「生産者たちの性格そのものの奥深い変化」こそが労働の社会化として考えられる。

この7つの諸過程のなかに現われる生産者たちの性格そのものの奥深い変化は、「自分のための生産は社会全体のための生産に転化する」、「生産の旧来の細分状態にかわって……生産の集積をつくりだす」、「人格的隷属の諸形態の駆逐」、「住民の移動性」、「大きな工業中心地の数の増大」、「結社への、結合への住民の欲求の増大」、「精神的風貌の変化」のなかに現われるのである。(性格そのものの奥深い深化の具体的内容はここでは分析されない。)

このような、社会的労働の生産力の向上と労働の社会化論は、もちろん資本主義的生産を分析したものである。しかし、その内容的特徴、たとえば技術の改造、社会全体のための生産等々は、日本農業の現段階を非常によくあらわしており、同じ傾向をもっていると考えられる。すなわち、この理論を再構成し現在の農民経営に適用することは日本農業の性格変化、農民の性格変化とその矛盾分析の有力な理論となる。

3) 農業技術教育は、1)、2) の検討とともに技術論、教育論等の検討をふまえなければならないものである。これらは今後の課題とする。

注1. 「ロシアにおける資本主義の発展」『レーニン10巻選集別巻I』 大月書店 1972

注2. ここでつかわれている包摂という言葉は、経済学用語とすれば適当ではないと思われる。

注3. 『現代資本主義と農業問題』 井野隆一 大月書店 1975

注4. 注1.と同じ

注5. 注1.と同じ

表1　『ロシアにおける資本主義の発展』における労働の社会化論

	①	②	③
	≪Миссия≫ каптализма　（目次） Повышение производительности общественного труда 597-598. —Обобществление труда 599-601.	資本主義の「使命」　（目次） 社会的労働の生産性の向上（526-527）‥一労働の社会化（527-528）	同左（注2）　（目次）
A	p 597 Прогрессивную историческую роль капитализма можно резюмировать двумя краткими положениями: повышение производительных сил общественного труда и обобществление его.	P 526 資本主義の進歩的な歴史的役割は、二つの短い命題に要約することができる。すなわち、社会的労働の生産力の向上と労働の社会化である。	p 631 …同左…… …… 社会的労働の生産力の向上とこの労働の社会化である。
B	p 597 Развитие производительных сил общественного труда …	p 526 社会的労働の生産力の発展は…	p 631 同左
	p 598 Другая особенность развития капитализмом общественных производительных сил …	p 587 資本主義による社会的生産力の発展のもう一つの特性は…	p 632 …同左…… 他の特殊性は……
C	p 599 Обобществление труда капитализмом проявляется в следующих процессах.	p 527 資本主義による労働の社会化は次の諸過程のなかに現われる。	p 633 同左
D	p 601 —все это не может не вести к глубокому изменению самого характера производителей, …	p 528 —これらすべて、生産者たちの性格そのものの深刻な変化をもたらさないわけにはいかないのであって……	p 634 —これらすべてのものは、生産者の性格そのものの奥底からの改変にみちびかないではおかない。

注1. ①В. И. ЛЕНИН ПОЛНОЕ СОБРАНИЕ СОЧИНЕНИЙ ИЗДАНИЕ ПЯТОЕ ТОМ3 ИЗДАТЕЛЬСТВО ПОЛИТИЧЕСКОЙ ЛИТЕРАТУРЫ МОСКВА. 1971
②レーニン10巻選集　別巻I　大月書店　1972　〔『レーニン全集』（第5版）の訳〕
③レーニン全集　第3巻　大月書店　1972　〔『レーニン全集』（第4版）の訳〕
2. 同左とは、ほぼ同じという意味であって言語上若干の差はある。

表2　『人民の友とは何か』における労働の社会化論

①p177

Обобществление труда капиталистическим производством состоит совсем не в том,что люди работают в одном помещении(это только-частичка процесса),а в том,что концентрация капиталов сопровождается специализацией общественного труда,уменьшением числа капиталистов в каждой данной отрасли промышленности и увеличением числа особых отраслей промышленности;—в том,что многие раздробленные процессы производства сливаются в один общественный процесс производства.

②p91

資本主義的生産による労働の社会化は、けっして、人々が一つの場所で労働することにあるのではなく（これは過程の一小部分にすぎない）、資本の集積にともなって社会的労働が専門化し、各産業部門における資本家の数が減少し、個別的な産業部門の数が増大すること、一すなわち、多数の分散した生産過程が一つの社会的生産過程に融合すること、にある。

③p173

ほぼ同じ

④資本主義的生産による労働の社会化は、けっして、人々が一つの場所で労働することのなかにあるのではなくて（これは過程の一小部分にすぎない）、資本の集積が社会的労働の専門化、各産業部門における資本家の数の減少、個別的な産業部門の数の増大をともなうこと、一すなわち、（生産の多数分散した過程が生産の一つの社会的過程に融合すること）、のなかにある。

注1.　①表1と同じ、ただし第1巻
②表1と同じ、ただし第1巻
③表1と同じ、ただし第1巻
④私論

研究室日誌（昭和５２年度）

4月	2～4日	日本農業経済学会（於・仙台）（参加、美土路、山田、柳田）
	30日	研究交流会「社会教育施設をめぐって－公民館を中心に－」
		◦美土路「共同消費・生活手段としての社会教育施設の動向と問題点」
		◦山　田「コミュニティ施設の運用を中心に」
		◦高　倉「地域住民の公民館職員に対する意識と評価」
5月	14日	研究室学習会「総合技術教育と農民教育に関して」
	17日	社会教育施設見学（苫小牧）
6月	10日	月形町予備調査
	19日	社会教育学会6月集会（参加、美土路、山田、高倉、木村）
	25～26日	社会教育学会東北・北海道6月集会
		◦山　田「域地社会の変容と住民自治」
		◦高　倉「戦後社会教育施設行政の展開と問題点－公民館・図書館を中心に－」
		◦美土路「農家婦人の労働・生活と要求の一断面」
		◦千　葉「変貌する農村と農家婦人」
7月	18～22日	学生社会調査実習（月形町）
	26～29日	社会教育論公開講座（置戸町）
		第Ⅰ講　布施鉄治北大教授「農村社会の変動」
		第Ⅱ講　美土路　「社会教育の動向と課題」
		第Ⅲ講　山　田　「農民教育論」
		第Ⅳ講　高　倉　「社会教育行政・施設論」
		第Ⅴ講　山崎真秀北大助教授「憲法教育基本法と社会教育」
8月	1～2日	第16回北海道民間教育研究集会（稚内市）（参加、美土路、山田、高倉、他学生1名）
	12～19日	別海酪農経営調査会（酪農機械体系と労働編成を中心に）（山田、木村）
	22～26日	大学院集中講義（那須野隆一日本福祉大学助教授）
	27～28日	社会教育研究全国集会（福岡）（参加、美土路、千葉）
9月	7日	有珠山噴火の見舞で研究室として洞爺村訪問（参加、山田、藤田、千葉、小枝）
10月	7日	生涯学習ゼミナール（於・北大）
	8～10日	日本社会教育学会研究大会（於・北大）
		◦美土路・木村・千葉「農民労働の社会化と主体形成」
		(1)「総論」　美土路
		(2)「農業における婦人労働の性格変化と主体形成」　千　葉
		(3)「酪農生産力の農民的展開と主体形成」　木　村

		◦山田・藤田・柳田「大型機械化「一貫」体系にともなう農業生産の社会化」
		(1)「総論」　山田
		(2)「大型機械化「一貫」体系段階の共同化の特徴について」藤田
		(3)「大型機械化「一貫」体系にともなう労働編成の変化」　柳田
		◦高　倉「北海道における社会教育の計画と施設」
		◦山　田「農民教育の現状と課題」
	8～10日	北海道社会教育推進協議会設立総会（於・北大）
	11日	社会教育学会エクスカーション（小樽、岩内）
	11～12日	社会教育学会若手研究者交流（於・雷電）
	20日	八雲町「集団づくり入門講座」
		◦木　村「グループにおけるリーダーの役割」
	30日	合同教研集会（札幌）「労働者農民教育」分科会（参加、美土路、山田、木村、柳田、小枝）
11月	8～11日	士別市における減反と兼業化調査（参加、山田、柳田、小枝、他学生1名）
1月	6日	産業教育計画研究施設公開講演会「酪農生産力の現段階と農業教育計画」
		◦山　田「酪農民の意識と要求ーアンケート調査を中心にー」
		◦木　村「酪農生産力の現段階と酪農民の主体形成」
	7・8日	北海道農業教育研究会総会
		北海道職業教育研究集会（参加、山田、柳田）
2月	4～5日	社会教育推進全国協議会総会（第14回、京都）（参加、柳田）
	4～6日	全農協労連第16回中央労農研究集会（於・秋田）（参加、山田）
	18日	北海道教育学会研究大会（岩見沢）報告・参加
		個別報告
		◦千　葉「農業労働における農家婦人の地位と性格」
		学生部会
		◦藤　島「機械導入にともなう農業生産力構造の展開過程」
		◦伊　藤「農業生産組織の形態過程と農民諸階層の対応」
3月		

＜昭和52年度関連講義・ゼミナール＞

〔学　部〕

◦講義……社会教育論Ⅰ（前期）（美土路）
農民教育論　（　〃　）（山　田）
教育学概説　（後期）（美土路、山田、高倉）
婦人教育論　（前期）（布施晶子非常勤講師）
社会調査実習Ⅰ（美土路、山田、高倉）

◦ゼミ　専門演習ⅠⅡ　（　〃　）

前期テキスト『ロシアにおける資本主義の発達』（レーニン）
後期　〃　『住民の学習性と社会教育の自由』（小川利夫編）
基礎ゼミテキスト『空想から科学』（エンゲルス）
〃　『現代社会教育論』（千野陽一）

〔大学院〕

○大学院集中講義一講師・日本福祉大学助教授那須野隆一氏

○大学院ゼミ『農業技術論』（美土路、山田、高倉）
テキスト『北海道農業発達史』（北海道立総合経済研究所編）『労農同盟論』（国民文庫）『農村婦人論』（美土路、山田、高倉）『資本論』（山田）